

「緩和ケア」という言葉はご存知ですか？

弘前大学大学院医学研究科腫瘍内科学講座 教授
弘前大学医学部附属病院 腫瘍内科 科長 佐藤 温



みなさん、こんにちは。わたしは、大学病院でがんを抱えた患者さんに薬物治療を専門的に行う部署（腫瘍内科）で働いております。「なんだ、抗がん剤屋か、緩和ケア屋の敵じゃないか、そんなお前がなんで巻頭言なんだよ」なんて冷たいことは仰らずに、ちよつとだけお付き合いをお願いします。大学病院では、医師の他、専門看護師及び心理士らで構成した緩和ケアチームが毎日入院患者さんを回診し、疼痛緩和を外来で診ておりますし、がんサロン（がん相談支援センター）では、がんに関する様々なご相談を受けております。でも、抗がん剤屋であるわたしは、そんな方々とも決して敵対するわけではなく、いつも仲良くかつ専門的につながつて一緒に仕事をしているんで

す。本当ですよ、関係者に聞いてくださつても構いません。つまり、積極的抗がん治療を行うには、緩和ケアはなくてはならないものなんです。さらに言えば、がん拠点病院でがん治療に携わる医師のほとんどは厚生労働省の定める緩和医療研修会を受けているんです。そう、がん医療においては「緩和医療（ケア）」はとてとても大切なものなんです。

がん医療における緩和医療を簡単に言つてしまえば、がんに伴う体と心の痛みを和らげることです。内閣府の平成26年度世論調査報告では、「知っている」と回答する者が約7割、「知らない」と答えた者が約3割だったそうです。みなさんはご存知でしたでしょうか。日本緩和医療学会は、緩和ケアの普

及啓発活動として「オレンジバールンプロジェクト」を展開しております。また、青森県は、がん拠点病院を中心に様々な催しを通して普及啓発を行っております。どうして今まさに普及啓発活動が活発に行われているのでしょうか。それは、医療者側が、みなさんの意志を尊重できる医療を展開していきたいと考えているからです。では、何故今なのでしょう。それは、近代になり、社会構造の変化から医療のあり方が変わつてきているからなんです。

現代の医療では、患者さん自身が医療に参画することが求められております。通常、患者さんを蚊帳の外において医療が行われることはありません。ひと昔前の医療はパターナリズム（父権主義）と呼ばれる医療が

一般的でした。「つべこべ言わずにおれの言うことに従つていればいいんだ！」的な言い方をする医師の態度を経験した方々もおられるのではないのでしょうか。えっ？今もいる？それはあまり好ましいことではありませんね、医者という事さえ聞いていれば治るような病気であれば、それもありません。でも、がん治療の領域、特に治ることが期待困難な状況の病気だと、そう言われるわけにはいきませんよね。がんという病気を抱えて過ごしていく人生は、みなさん個々人の人生であり、みなさんの意思がなければなら満足は得られないのではないのでしょうか。現代はこのように、あらたに患者視点の医療が必要に迫られるようになりました。この時代の流れの中、がん医

療の領域では緩和医療の意義が重要視され、さまざまな治療があらためて緩和医療として取り上げられるようになったのです。以前は「緩和ケア」とは、ターミナルケア（終末期ケア）とか、ホスピスケアといった終末期医療に限定されたものを指し示していましたが、現代は、がん患者の疼痛管理、症状管理、インフォームドコンセント、そしてがん薬物療法における支持療法等々すべてが、緩和医療に含まれるようになりました。もちろん、過去のパターナリズムな医療でも、決して緩和医療行為が行われていなかったわけではありません。けれども患者さん視点での医療が次々と

展開されてくる中、緩和医療とされる医療行為に対する認識が変化してきているのです。碎けた説明をすると、がんという病気そのものへの治療を積極的な抗がん治療とすれば、緩和医療は、がんを抱えた患者さんのつらさに対する治療ということです。つまり、患者さんあるいはそのご家族に「つらさ」があれば、そこに緩和医療が行われる意義があるのです。がんと診断されたとき、だれしも心につらさを抱きます。だからこそ、診断時から緩和医療が開始されるのです。

「病気を診ずして病人を診よ」という言葉を聞いたことがありますか？わたしたち医療

者へ向けたとても有名なメッセージなのですが、東京慈恵会医科大学を創設された高木兼寛先生の説かれた理念です。医の倫理とされるものですが、明治時代のはなしなんです。緩和医療も、がん薬物療法や手術、放射線治療等のがん治療も、医の倫理上に同時に展開されるものであり、決して、対立するものではありません。わたしが伝えたいことは、がん医療においては、医療者は積極的抗がん治療と緩和医療とを包括した医療を提供できる能力をもつべきであり、患者さんやご家族は包括した医療を受けるべきだということです。もう少しかみ砕いて説明をさせて下さ

い。患者さんご家族の方々は、苦しいときに苦しいと、つらいときにはつらいと素直に伝えること、そしてその苦しみやつらさに対する医療を十分に受けられること、苦しさやつらさは身体的なものに限らず、精神的なもの、社会経済的なものなど含めたすべての苦しみやつらさのことであることです。お気づきになりましたでしょうか。緩和医療ひいては医療を満足いくものにするためには、医療者と患者さんの対話こそが必要なんです。みなさん、一緒にじっくりと取り組んでいきましょう。

